名古屋女子大学　紀要　45（人・社）　85～98　1999

1960年代初期のトルコの村の生活

伊佐治大陸

Life in a Turkish Village in the early 1960's

Tairiku ISAJI

はじめに

1991年の「トルコとの出会い」を契機として、少なからぬトルコ関連図書が研究室の一角を占拠するようになった。そのうちの一冊 "Life in a Turkish Village" (1) は、トルコの教育と人口問題に関心を持つ筆者にとって、とりわけユニークな存在感と不可思議な魅力に溢れている。それは、東京都港区北青山の伊藤忠商事本社ビル内にある日本・トルコ協会事務局のオフィス・スタッフの鈴木女史から一読を勧められたトルコの村の生活に関する著書である。著者のJ.E.ピアースは当時（1964年）ポートランド州立大学の人類学の准教授であり、1950年代後半から1960年代初期にかけて足掛け6年半に及ぶトルコ在住を経験して、この間のフィールド・ワークの成果を本著書にまとめている。トルコ滞在中、彼はアンカラ大学政治科学部やアンカラのガジ教員養成機関（現ガジ大学教育学部）でも教鞭を取り、一方、母国ではオクラホマとオレゴンのアメリカ・インディアン研究のためのフィールド・ワークに従事した経験を持つ。

本著書は一村落デミルジレール（Demirciler）を典型事例として、アナトリアの村における農民の生活を単純正確に描こうとしたものである。アンカラ滞在中、ピアースは情報提供者の一人のトルコ人の青年の助力により、彼の村の詳細な生活の様子について情報入手することができた。実際に彼の村を訪問し、自分自身の目でも観察を行っている。青年の母親も別の価値ある情報を提供し、この二人から得られた一村落における詳細な生活の様子は、ピアースが訪れた他の村々における観察によって一層広いコンテキストが与えられた。本著書は、言わば合成された村デミルジレールを描いており、幾つかの村における彼の観察から引き出されたものである。別の意味からすれば、典型事例としてのアナトリアの一つの村に関する著書であり、トルコの村の文化を明らかにしようと意図されたものである。

本著書は二部構成から成り、第一部では一人の少年マームッド（Mahmud）を登場させ、男性の役割習得への人生の長期研修を開始したばかりの少年の目を通してアナトリアの村の生活を案内する。「割礼」から「家を建てる」「結婚」「大人になる」「生計」「井戸堀り」「食事の準備」「兵役」「モスクの学校」「トルコ風呂」「犠牲祭」「断食」「生と死」に至るまで村に関する様々な事柄や活動が取り上げられ、少年のマームッドは村の文化を学習しようとする者のモデルである。第二部では、アナトリアの村の生活に関する分析がなされ、村の社会システム、経済・政治のしくみ、宗教的民間信仰、言語、世界観等について叙述解釈がなされる。第二部はトルコの村の文化に関する人類学的見地からの理論的叙述の試みである。

1960年代初期のトルコのアナトリアの村を対象としてはいるものの、それは都市社会化する現在のトルコがその背景に持つ「故郷としてのアナトリアの村」でもある。近代化・工業化を目ざす現在のトルコは、総人口6380万人（「世界人口白書」1998年より）のうち69%が都市部に生活し、地方の田舎には最早31%しか生活しない現実がある。しかし40年前の我が日本に目を向ける時、当時の我々日本人もようやく農村的生活様式から抜け出して都市的なそれへと転換し、しかもその様々な歪みをポストモダンの現代にまで引きずってはいないだろうか。日本人全体の農村的生活観念から都市的生活観念への転換過程の中で、現代の我々日本人は「人間存在の中核」としての心の中の最も大切なものを喪失さえしてしまったのではないだろうか。我が日本の場合とは差異ある農村生活ではあるが、我々自身を見つめ直すためにも、本稿ではトルコにおける「故郷としてのアナトリアの村」に注目してみたい。スペースの制約上、本著書第二部に焦点を当てつつ、筆者なりの若干の加除修正と再構成を行って、「デミルジレール村」「社会構造」「親族名称」「ムスリムの生活様式」「村の教育」の５つの柱からトルコの村の生活・文化を描写することとしたい。それでは、読者と共にほぼ40年前のトルコのアナトリア地方へとタイム・スリップし、しばしの間、本物の文化人類学者或いは教育人類学者の気分よろしくデミルジレール村の実態をフィールド・ワークキングすることとしよう。

1　デミルジレール村

マームッドの村は中部アナトリアの典型的な村である。トルコではアナトリアをアナドールと呼ぶが、それはアメリカ人が小アジアと呼称する地域である。中部アナトリアは海抜600m以上の半乾燥高原である。アナトリアのトルコ族はカフカース系民族とモンゴル族の混血であるが、村の住民はモンゴル族の特徴を示さない。彼等は人種的に北西ギリシャの西洋人と血が繋がるように見受けられる。彼等の皮膚は日焼け部分以外は色が薄い。目は茶褐色、髪は黒髪である。年長の多くの男性は濃い口髭を生やし、一般に男達は毛深い。彼等は中背で平均して170cm程度である。３重４重のどってりした衣服を着用しているため、女性を外観から描写するのは難しい。中部アナトリアでは人々は遠くに散在して住み着いている。事実、幾つかの地方を数時間ドライブすると、やっと人の生活の兆候を見ることができる。アナトリアはトルコにおける最も原初的な地域であり、最近まで地域を取り巻く山脈によって外部世界との接触が結果的に遮断されていた。農業機械化による小麦等の穀物の大規模生産化の潜在可能性があるとは言え、中部高原はそれ以外の地域ほど生産的ではない。

デミルジレールはカマン（Kaman）の近くにあり、カイセリ（Kayseri）に向かうアンカラから約110km南東の距離に所在する。高速道路には直接接していない。1961年現在、カマンに着く前に脇道に入り、牛車用小道を約２km運転して、急激に傾斜する丘の斜面を昇るとばらばらに広がる石と泥レンガ造りの一群の家々に到着する。村は独立した居住単位のおよそ50家族から成る。家族規模は多様で、単純な核家族から２～３人の結婚した息子達とその子供達のいる年寄り夫婦が一つ屋根の下に住む拡大家族まである。1950年当時は僅か15家族であった。15から50家族への増加は異常であるが、それはトルコ全体に起こった一般的な人口爆発を示唆している。(1) カマン及びアンカラに向かう高速道路への近接性が村人達の生産物を市場出荷させやすいため、人口が安定的に増加した、(2) 鋼を曲げた犂により、従来の木製犂の場合よりも大きな余剰生産が可能となったことの２つの要因が村の人口増加を加速化させた。更にカマンへの近接性により、大抵のアナトリアの村では利用できない良い学校と医療施設へ行くことができた。デミルジレールから約２km離れた高速道路に立ち、村の方を見上げると何も見えない。

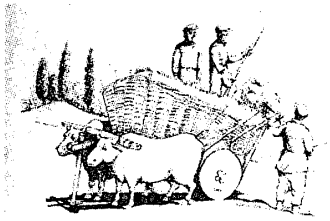
遠くからは殆ど家は見えず、見えたとしても地面から生えたように土と同色である。2～3の家が経済的に裕福になった結果、外壁に若干の漆喰が塗られているに過ぎない。村には建築計画がないため、家々は建築者の好みのままにあちこち向いている。通りらしきものはでこぼこで、曲がりくねった小道が家々の間を縫っている。タイル張りの屋根の唯一の村の建築が新築のモスクであり、それは1961年当時まだ築後約10年であった。殆どの家は長方形の一階建てで、どれもフロアプラン方式で区切られている。平らな泥屋根には大雨の後に屋根材を押し付ける白い石のローラーが頂上に付いている。降雨は稀だが、晩冬または初春に降り、時に悲惨な大雨となる。豪雨のため家が「溶けて」しまい、壁を修復しなければならない時もある。年間平均降雨量は僅か25cmを越す程度であるが、多くの場合、初春に酷いドシャ降りとなる。夏の空は典型的に雲一つなく、空気は澄んで明るい。7～8月でさえ日中は暑くても夜は相当涼しい。

村の中央に鉄の飲み口のついた噴水があり、そこから絶えず水が流れている。ここは村全体の水の供給源である。少女達は料理、手洗い用の水として陶器や銅製ポットに入れて家に運ぶ。洗濯は噴水の脇で行う。毎朝、それぞれ一山の洗濯物と大きな銅製ポットを持った一群の女性達がやって来て、飲み口から水の落ちる石造りの平らな場所で噂話や洗濯をする。メンデレス政府は山脈の水源からちょうど村の丘の貯水池へ新しい水道管を引いた。これはカマンへの水供給を施設するもので、政府はまもなく村の家庭にも水道を配管する約束をしていたが、政権交代と1962年のメンデレス処刑に伴い、約束はもっと時間を要することとなった。村の多くの家には1958年に敷設された電気がある。しかしこの便宜は心もとなく、夕方6～9時しか使えない。2～3の大きな部屋の天井から一本のワイアー線しか吊してない家もある。壁に一個だけ差し込みがあっても、それに用いる電気器具の無い家庭もある。

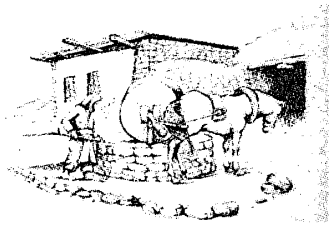
村から西方を見ると、遥か遠方にゆっくり傾斜する丘のでこぼこが眺望できる。これらの丘の外貌は、春の草が緑色になる4～5月の数週間を除き、どんよりした灰色である。谷間の春は若い小麦で緑となり、実った穀物の穂で6月末から金色となる。これらの谷間の畑では複数の牛を連れた男が一人で耕作し、自分の家族と販売用の僅かの余剰生産をもたらすのである。あちこちに木々の小さな木立が散在する。木立は僅かの水源の近くに生長する。木立の下の気ままに流れる水が十分供給される所では、潅漑されて野菜畑となり、彼等はトマト、胡椒、ナス、カボチャ等の野菜を栽培する。数世紀にわたり、人々と環境の関係はこの地域の水の必要により決定づけられた。水のある場所はどこでも豊かな緑の草木が茂るが、水の無い丘のごつごつ岩の表面には雑草が僅かに生育するだけで、そこでは丈夫な羊と山羊だけが生き延びられる。村人達は農業と家畜に頼る暮らしである。小麦粉の余剰物は小麦銀行に売却される。羊、山羊、野菜の余剰物はカマンで売られ、その現金で必要な製品を購入する。生計基盤は小麦農業である。一人の成人男性は自分に可能な広い土地を耕作し、一回で耕作できるよりも広い土地を所有する。最近まで土地は木製犂で耕作されたが、1961年には小さな鋼を曲げた犂が木製の原始的な農具と置き換わった。鋼の犂には10cm弱の曲がった刃が付き、大抵は今でも複数の牛で引かれ、時には馬が使用される。しかし、他のアナトリアの村では殆どの農民達は今も木製犂を用いる。石がごろごろの土地で肥沃でないため、大変骨の折れる労働となる。土地は犂で耕し、石を畑から除去して近くに山積みにする。この過程は石がなくなるまで繰り返さなければならない。次に一本の木で出来た天然まぐわが、複数の牛又は馬のくびきにかけられた柱に取り付けられる。それで土地を引きずって一塊の土くれを粉砕する。最後に穀粒を手撒きし、もう一度まぐわを引いて種に土を被せる。

小麦の穂が実ると小さな手鎌で刈り取る。刈り取ったものは木製熊手で山積みにする。小麦

の山は畑が全部刈り取られるまで地面に置かれたままである。次に二輪牛車に積まれる。小麦はこの牛車で畑から少し離れた脱穀場の床まで引いて行く。ここで小麦は堅い床面に広げられ、平らな盤で挽いて脱穀する。盤は前方で折り返し、短いリュージュとよく似ている。火打ち石又は黒曜石の鋭い薄片が脱穀そりの底に埋め込まれ、穀粒と殻を分離する効果的切断の役目を果たす。この装置は大抵は牛によって引かれ、時には馬、トラクター（頻繁ではないがカマンからの賃貸）又はロバによってさえ引かれる。穀粒が殻と分離されると、丸い脱穀床の中央に山積みされ、穀粒と籾殻は底が針金網の木製円柱状容器で空中に投げ上げてふるい分けされる。麦藁と籾殻は様々に利用し、羊、牛等の餌、土と混ぜて建築材料、糞と混ぜて燃料等に用いる。穀粒は大きな布に広げて乾燥させ、後で使用できるよう袋詰めして貯蔵する。必要な時、穀粒は水車小屋に運んで粉挽きする。製粉機は２個の水平な石から成り、一方が他方の石の上に乗っている。下の製粉石は固定され、回転するシャフトが中央の穴で回っている。上の石はシャフトに連結し、煙突型の空洞の木から水平に流れる水力で回転している。空洞の木は垂直に立ち、もっと高いところの泉から集水している。小麦は上の石の中央の小穴に注がれ、石の回転に伴って粉になる。小麦粉は端から出てきて製粉機の回りに小山となる。小麦粉を拭い去り、大きな白い袋に入れて村に持ち帰り、必要な時まで貯蔵する。約３カ月毎に大勢の女性が集まり、一釜分のパンの塊をこねる。次にそれを転がして一日かかって直径約50cm、厚さ約３mmの薄いパンの材料を作る。これを地下式暖炉を覆う凸面の鉄製円形盤の上で焼く。その日の夕方、各家族は２～３山の革のような堅いパンを持ち帰るが、パン一山で高さ１ｍもある。味が良いだけでなく栄養豊富であり、次のパン焼き「寄り合い」が行われるまで３カ月間長持ちする。パンにはイースト菌が入っていない。パンは大サジ代わりの役目を果たす。パンで村人達の作る多様な種類のシチューを食べることができる。一枚のパンを小片にちぎってそれを指に器用に包み、スプーンもどきの小型のサジを作ることができる。これを皿に浸してスプーンも食べ物もいただくのである。



木輪牛車で収穫小麦を運搬 (2)



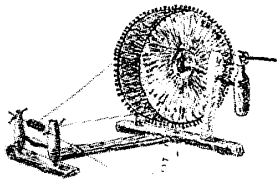
馬を使って小麦のひき割り (3)

村の大抵の生計は羊と山羊で成り立つ。この家畜は丘の僅かの草を食べ、食料用に屠殺され、羊毛は刈り取られ、現金売却される。羊飼いは毎朝村にやって来て、羊を全部集める。羊は村の共有空き地で昼中は監視される。この土地は誰も農地用に耕作できない。子供達が成長して、全ての者に農地が行き渡らなくなる時、この禁止がお手上げとなるかどうか注目する価値がある。毎夕、動物は村に連れ戻される。羊飼いは時々村人達からお金か動物の贈り物で報酬を得る。羊飼いの男は村にもカマンにも所属しない。農民達は余り肉を食べないが、結婚式、来客、特別行事用に一頭屠殺される。一頭分を焼く以外に肉の保存方法はなく、全部食べ終えるまで毎日再過熱する。料理の共通の方法は大きな共同使用の釜戸で丸ごとローストすることである。野菜に少し肉を混ぜて湯に浸したものが一般的で、多様なライス入り料理は少量の肉を混ぜて味付けする。米は村では栽培されず、カマンで現金購入する。料理では、村で栽培しない野菜や果物を米に添えて種々味付けして用いられる。葡萄、メロン等の野菜は潅漑菜園で栽培され、余剰物はカマンで売られる。村で育たない野菜は南部からトラックでカマンに運ばれて来る。

潅漑システムは複雑で、溝、土で出来た盛り上がった水路、小水路へ流水できるよう半分空洞にくりぬかれた木から成る。水は近在の泉から絶えず流れ、これが継続利用される。泥で一

つの水路を遮断して水を１～２の畑に流し込む。次に別の水路を開ける。貴重な水は僅かでも浪費されない。一か所に水が行き渡ると小川は遮断され、乾いた畑に流水するよう別の水路が開かれる。デミルジレールは水が豊富な点では幸運である。

太い糸は羊と山羊の毛で紡ぐ。女性達は木製の螺旋巻きに器用に糸を巻き付ける。糸は染色され、素朴なヴェスト、ソックス、カーペットに使用される。長枕、ハンドバッグ、ロバの背中で重い物を運ぶバッグ、村の家庭用の床絨毯も皆この材料から作られる。水牛も大切な動物である。けん引用の動物として役立ち、食用肉にもなるが、同時に乳も生産する。ロバは村人が行きたい場所へ一緒に生産物を運んでくれる。チーズやアイラン（ayran）と呼ばれるバターミルク風飲み物は彼等が乳から作って常用するが、販売はしない。乳搾直後の新鮮な乳を煮沸し、木枠に固定した牛皮袋に注ぎ込む。牛皮は汗をかき、中身は涼しく保たれ、その間に乳は酸っぱくなる。必要時まで保存され、チーズ、アイラン、バター作りの時に取り出される。



木製の糸紡ぎ機 (4)

村の４人の男達、村長（Muhtar）、ホジャ（Hoca 導師、ムスリム管理者）、村の監視人（Bekçi）、畑の監視人だけは政府から現金収入を受ける。村長は出産、死亡、結婚の記録、税金徴収、毎年兵役に行く男達の選抜、来訪者のもてなしについて責任を持つ。ホジャは村の精神生活とモスクの世話に責任がある。村の監視人は保安維持を受け持ち、誰かが目に余る規則違反をすれば憲兵に知らせる。畑の監視人は動物から畑を守る。ホジャ以外は全て選挙で選ばれる。村は最近まで自給自足経済であった。大抵の年長者は鉄製道具以外の必需品は殆ど何でも作り方を心得るため、将来に状況が必要となればきっと再び自給自足可能となるだろう。しかし、現在のデミルジレールはトルコの国民経済に急速に統合されつつある。それは増大する綿衣料、灯油に伴う貨幣経済の進展を意味する。それ以外の製品も毎年外部から持ち込まれ、絶えず増産される余剰小麦、野菜、羊毛と交換される。綿衣料は羊毛衣料と置き換わり、集めた糞を麦藁と水で混ぜて作る従来の燃料は乾燥させて燃えるようにしたパンケーキ状燃料であるが、それも灯油と置き換わりつつある。西洋式の木製テーブルや椅子等も新たに入ってきた。村の急激な人口増加は今までのところ経済基盤を変化させてはいない。殆どの若い人々はまだ成人に達していないからである。伝統的経済を若い人々が全て吸収できないという事実は、子供達の教育機会の普及と相俟って、近未来に何人かの若い夫達はカマンで就業し、現金収入のみによる生活を意味するだろう。そうとなれば、今なお残る伝統的生活様式は消滅に向かうだろう。1961年の子供達の大部分は２kmの徒歩でカマン郊外の新しい公立学校に通っている。公教育の普及と押し寄せる社会開発の波は、「古き良き」村の伝統生活を変容させざるを得ない。

2　社会構造

デミルジレールは同族結婚の村である。これはトルコ人の村としては一般的ではない。アナトリアは過去5000年間にわたり様々なエスニック集団により征服・被征服が繰り返されてきたからである。デミルジレール村の場合、男がその村以外の女性と結婚すれば、彼は社会的プレッシャーにより離村せざるをえない。

結婚を規制する唯一の原則は「近親」結婚の回避であり、ここでの「近親」とは７親等より近いことを意味する。結婚の仕組みの理解のためには各家が拡大家族であることに注目すべきである。それは一人の男、その息子達の妻と子供、孫息子達の妻と子供等々から成る。一つ屋根の下に住むこの家族は、最年長の男の死去又は高齢時に崩壊する。こうしておよそ50家族の

各々は３～５世代の親戚を持つ。さて結婚に至る仕組みに進もう。自己（ego）の両親は１親等、両親の両親は２親等、その又両親は３親等であり、従って自己の家に住まない者は誰も、母親の実家に住む人以外は自動的に３又は４親等である。ここで３親等の家族つまり母親の実家以外の村のどこかの家族を取り上げ、その家長が自己の家の家長の兄弟だと仮定する。自己の家長が曾祖父（結婚は往々16～17歳で行われ、子供達は通常は結婚後の数年で毎年誕生するため、曾祖父の存在はかなり普通の状態である）であれば、彼は３親等離れている。家長が４親等の場合（二人の家長が兄弟の時、兄弟がいなくて父親の時）は、彼の子供は５親等、孫は６親等、曽孫は７親等である。このように自己の母親や自己自身を除き、自己と同世代の村の家族の子供達の誰かは血縁的に自己とかなり離れている。別の例として、ある特定の家族の家長が自己の曾祖父の一番目の従兄弟だと仮定する。それは二人の家長の３親等となる。自己の曾祖父は３親等離れている。これは他の家長からは６親等、その子供からは７親等、その家族の同世代からは８親等である。自己の母親との関係からすれば、彼は母親の両親（母親の実家の家族の中で生活）からは２親等、母親の祖父母から３親等である。そのうちの一人は第３家族となる。従ってどの方向へ行っても、どの親戚を辿っても、自己の家族と母親の父の家族以外は、自己はどの家族の誰からも３親等より近親ではない。このシステムでは、自己の母親又は父親の拡大家族の誰かとの結婚は妨げられるが、村の中の彼と同世代の誰とでも結婚できる。

ところで、村のどの家にも男女別々の２つの居間があり、それは両性別々の機能を持つ。村人達がくつろぐ時は常に、男達は男部屋、女性達は女部屋でくつろぐ。女性が男部屋に入ることは稀である。男達が畑に出掛けた後に掃除したり、家族だけの場合に男部屋に入る。この習慣は西洋人にとっては興味深い。ある日、「年とった村長」（長年村長だったが、彼より年下の弟に人気があり、最近の村長選では選ばれなかった。村としては革命的出来事である。）が「美味しいものや冷たい水やらを飲もう」とアメリカ人の著者夫妻を家に誘った。著者達が訪れると、まず男集団に会った。男達は著者夫妻に挨拶し、「年とった村長」の妻が著者の妻を脇へ連れて行き、「ご主人はどれほど広い土地を持っているか」等と話し始めた。一方、男達は著者に畑や果樹園を見せた。ほぼ35歳以下の若い人達は皆、敬意を表して著者夫妻の手の甲に接吻したり、その手を自分の額に当て、「ようこそお出でいただきました」を意味する歓迎の表現「喜びと共にやって来る」（“hoş geldiniz”）を口にした。

実質上の働き手である女性達と10代の少年達は家から140m程の日蔭で著者達のために忙しく準備をした。ちょうど正午過ぎ、この日陰場所に案内されて腰を下ろした。そこは小川の辺りにあり、水は約３m下へと下って流れていた。葦製マットが地面に広げられ、その上に美しい手織り絨毯が4.5m四方の広さで敷いてあった。絨毯のあちこちに沢山の小枕が置いてあった。著者は早速小川に最も近い絨毯の一角の来賓席（非常に名誉ある客として）を与えられた。他の男達はその両側に座ったり、寄り掛かり、著者のすぐ近くには年長の男達、若い男達は離れて座った。女性と少年が家から食べ物入りの大盆やポットを運ぶ間、著者達は天候や収穫の雑談をした。しばらくして少年の一人が25cm程の高さの丸い木製スタンドを持参し、他の少年が丸ごとローストした子羊入りの銅製大盆をその上に置いた。子羊は盆にちょうど一杯の円形に縮まっていた。主人が子羊を切り始め、まず著者にその一切れを手渡し、次に他の男達に年齢順に配給した。彼は肉と一緒に大きなパン切れも与えた。著者の妻はこの状況下で常に男として処遇された。こうした場合、村人達は外国人女性をどう処遇していいか実際知らなかったからである。彼女は著者の次であり、村の男達より前に給仕を受けた。皆がおなか一杯食べると、女性達の一人が主人の手の合図により、盆を指し示して少年を睨んだ。少年は指示待ちでうろ

つき回っているようだった。彼はすぐ盆を除去し、その場所にライスの大きなポットを置いた。著者達がこれもおなか一杯食べると、別のコースが運ばれ、食べ終わるとまた取り除かれた。食事はお盆の葡萄で終了した。著者達はおしゃべりしつつ葡萄を食べた。その後、突然前触れなしに雨が降り始め、皆は何か大事なものを掴んで家へと駆け出したが、家に着いた時には雨は止んだ。パーティーは雨でぶち壊しとなったため、著者達は主人にお礼を述べて村を後にした。さて男性と女性の鋭い分離について振り返ると、男達が食事を終了し、しばらくの間葡萄を食べている時も彼女達は何も食べなかった。少年の一人がトルココーヒーを用意した。カップに粉状コーヒーと砂糖を入れ、熱湯を注いで掻き混ぜて作る。2～3分で出来上がり、コーヒー滓も全部飲んでしまう。少年はまず著者に、次に著者の妻に、そして最長老から始まって年齢順に男達の全てに給仕した。コーヒーを飲む間、女性達は少し離れた場所で自分達だけで食べ、男達は絨毯の上で気持ち良くくつろぎ、雑談した。この紛れもない宴会こそ、主人が著者達に招待しようと言った「冷たい飲み物や何やら」である。

以上のエピソードは、村の社会的相互関係を統制する2つの重要なメカニズムであるジェンダー分離と年齢秩序の見本事例である。老人と客（親切なもてなしは彼等にとり大変重要であり、中東の殆どの人々に共通する）は常に名誉ある席に着き奉仕されるが、まず客が年齢順に、次に年長者の最長老から最年少まで順にもてなされる。室内での男達の集会では、壁際の高いカウチのような突出部に年長者達が腰掛け、残りの者は床に腰を下ろす。女性達は別の部屋に集合し、男達のために食事とお茶を用意する。年長の女性がいる時は、男達の場合と同様に最年長者から順に敬意ある処遇を受ける。少年が男部屋に食事を運ぶ。これが村の人的関係が展開する最も重要な在り方である。このように社会階級に基本的に含まれるジェンダーと年齢は金、地位、肩書とは異なる。社会の底辺にはまず子供達がいて、割礼を受けた少年は少女や割礼前の少年より上位にある。既婚の男性・女性は2つの別々の集団を形成し、その両者とも子供達より上位（従って命令できる）である。既婚の若い女性は子供達に対してのみ上位であり、既婚の若い男性は既婚の若い女性と子供達より上位である。各々の階級の中でAがBより年長ならば、Aの方が上位である。既婚の年長の男性・女性の2つの階級は誰よりも幾分上位であるが、年取った女性は未婚の男、つまり子供と呼称される階級の者以外には余り男に命令しない。恐らく、コミュニティー内の最も不幸な者は若い新婚女性である。彼女は嫁（gelin）と呼ばれ、英訳すればそれは文字どおり「おいで」（come）を意味する。村のあちこちでこの“gelin”なる響きを耳にする。子供以外の誰もが嫁を呼んであれをしろ、これをしろと言う。まだ少女もどきの嫁は、自分が不平も言わずこれらの全てをこなし、彼等が要求する全てをうまくやり遂げることを夫の家族に証明し、自分の実家の家族の尊厳を維持しなければならない。トルコ全体で高率とされる神経衰弱は若い既婚女性に起こると言われる。結婚直後の適応期間はデミルジレールでは結婚式の翌日から始まり、通常は3年間、時には5年間続く。それは村によって異なる。年下の兄弟が結婚し、家族の下へ若い嫁が迎えられれば適応期間は短くなるが、夫が家族を説得して自発的に嫁を解放して上げない限り、適応期間は長くなる。夫が妻を愛していて、彼女を可哀想に思えば解放して上げることになる。家族がこれに同意すれば、男は妻に贈り物を与え、今やれっきとした夫人（hanım）であり最早嫁でないことを宣言する。

村人全員が農民であるから、拡大家族以外の職人組合等の特別の利害集団はない。拡大家族の各々は本来的に自分自身のさきゆきに関心を持つが、こうした特殊な村ではそれは重要ではない。誰もが一つの大きな家族単位のメンバーと考え、従って全体として村の福祉の促進に結び付いている。社会組織が村の活動の殆どを統制する一方で、政治権力は長期間認められては

きたが一般的にやや外圧的なものとしてであった。オスマン・トルコ帝国時代は税の未納や失礼な振る舞い（例えば兵役の拒否）がスルタンに対してなされた時のみ、中央政府の権力が身近なものとなった。スルタン統治の絶対権力の故に、村人達は通常は政府を攻撃しないよう注意を払った。この普段の注意とイスタンブールから遠距離のため、外部からの介入は稀だった。村と遠方の中央政府の結び付きは常に最長老の村長だった。彼は血縁関係集団の長でもあった。こうした状況は近年相当に変化した。将来は更に変化するだろう。新共和国の下では、村長は選挙による官吏であることが法律で要請されているが、1923年から50年代半ばまでその効力はなかった。村人は最長老だけに投票し、どの選挙でも彼を村長に就任させた。しかし、メンデレス政権下で実施の最近の選挙では、年老いた村長は落選した。村で2番目に年長の男が村長となった。大勢の若者が公立学校を卒業し、民主的手続きについても学習し、成長して投票者となれば、もっと若い男が村長に選ばれ、最終的に本物の選挙となるだろう。トルコの国政組織は立憲共和制である。1960年の軍事革命以来、新憲法はアタチュルクの下での一院制ではなく二院制が承認された。新憲法は旧制度には見られない多くのチェック・アンド・バランスを備える。アタチュルクの確立した二政党の代わりに四大政党となった。しかしこの村に関する限り、1960年は民主党（the Democrats）一党のみであった。この党が違法となって以来、村がどうなったかは定かでない。国はprovinceと同じ意味の県（vilayet）に分けられ、それはアメリカ中西部の郡規模に等しい。各県には県庁としての相当の大都市があり、県は県庁所在市と同一名である。デミルジレールはカマン県の一部である。県内の各町は3000～8000人の人口規模で、その周囲に郡（kaza）と呼ばれる一定の地域がある。共和国下では、村には3人の公選官吏の村長、監視人、畑監視人がいる。彼等は中央政府から現金給与を受ける。村の政治集団は存在しない。村長宅での全員の男達による冬の会合以外に村の会合はない。全ての男達がこの会合への出席が認められ、成人男子全員が討議に加わる。この集団は、女性の排除以外は、村に関する一切の問題を民主的に論議・決定する。これまで、村はこの種の「タウン・ミーティング」で十分なほど小規模だったためうまく機能したが、未来に起こる変化を実際の目で観察するのは興味深い。人口が増加し、多くの若者が成長して農業以外の職業に就くとすれば、もっと別の内紛が生じ、各々の職業集団が自分達の利害のために抗争し始めるかもしれない。従来の完全農業社会ではまだ遭遇しない何かが、未来に待ち受けているかもしれない。

3　親族名称

地域社会内で得られる地位はある意味で血縁関係により決定するため、この点から村の親戚を呼称する仕組みを適切に説明できる。一般に話しかけられる場合、特に話しかけられる個人が話し手より年長の場合、人は名前より血縁関係用語で呼ばれる。血縁関係用語は生物学的関係よりも人々の重要な文化的集団を反映する。血縁関係用語は、それによって社会が地域社会のメンバーを文化的理由のための階級に分類できる。生物学的な遺伝子の点からすれば、自己とその母親、父親とは一定の遺伝子を50％分け持ち、父方の叔父叔母、母方の叔父叔母とは25％という一定の遺伝子を分け持つ。アメリカ人の場合、叔父叔母と呼ぶ男性女性はアメリカ人にとって同程度の関係であり、父方、母方ともに同一名称を用いるが、父親側に関わるトルコ人の関係はそれとは異なる。つまり、母方側に関わる関係と父親側に関わるそれは異なる。トルコ人の仕組みではこの差異を明確に区別する。一方、アメリカ人が従兄弟と呼ぶ人々に対する名称はトルコ人の場合存在しない。

デミルジレールの場合、村の人々の血縁関係を3つの水平的階層に分類できる。自己より2

世代上の全ての男女は祖父、祖母を意味する用語が使われる。両親と兄弟姉妹を除く自己より1世代上の男女の全ては叔父、叔母に対応する名称で呼ばれ、自己より1世代若い全ての村人は子供と呼ばれる。聞き取り調査によれば、父母の母親とその姉妹はebe（お婆さん、婆）又はbüyük anne（祖母）のいずれか、父母の父親とその兄弟はdede（お爺さん）又はbüyük baba（祖父）と名付けられる。生物学的な母親はana又はanne（母）、父親はbaba（父）と呼ばれる。母親の兄弟はdayı（叔父）、母親の姉妹はteyze（叔母）、父親の兄弟はamca（叔父）、父親の姉妹はhala（叔母）と名称される。年長の兄弟はağabey（兄）、年長の姉妹はabla（姉）、年下の兄弟姉妹は性に関係なくkardeş（兄弟姉妹）と呼称される。このように年長の兄弟姉妹は性別で区別されるが、若い方は区別されない。母親の兄弟の子供はyiğin（甥、姪）で、標準トルコ語ではyeğenと名称されるが、これは自己の姉妹の子供もそう呼称される。これ以外の血縁関係用語は使用されない。アメリカ人が従兄弟と呼ぶ両親の兄弟姉妹の子供はただその名前で呼ばれ、文字どおり父親の兄弟の娘を指すamcanın kızı（叔父の娘）のように書かれる。自己の兄弟の子供は自己の子供と同じçocuk（子供）と呼称され、そのまた子供や子供の子供はtorun（孫）、孫（性別に関係なく）と孫の子供もtorunと呼ばれる。

血縁関係用語の意味要素をさらに検討すれば、村人達にとっての血縁関係の分類上の重要性に関する理解が深まる。次の一覧に示す基準に合致する村人は誰も、実際の生物的関係と関わりなく、同様の方法で自己を関係付けているものと考えられる。

親族名称	意味要素			
büyük baba or dede	祖父	男性	自己より2世代上	父又は母の血縁
büyük anne or ebe	祖母	女性	自己より2世代上	父又は母の血縁
baba	父	男性	親	
anna（anne）	母	女性	親	
amca	叔父	男性	両親の兄弟	父の血縁
hala	叔母	女性	両親の姉妹	父の血縁
dayı	叔父	男性	両親の兄弟	母の血縁
teyze	叔母	女性	両親の姉妹	母の血縁
yiğin（yegĕn）	甥と姪		dayı, ablaの子供又は女の子供	
ağabey	年長の兄弟	男性	兄弟	
abla	年長の姉妹	女性	姉妹	
kardeş	年下の兄弟姉妹		兄弟姉妹　自己より年下	
çocuk	子供		自己の子供又は女の子供	
torun	孫		子供の子供	

上記の一覧に示す意味要素をよく見ると、幾つかの事実が浮かんでくる。男性・女性は自己より年長の親戚かどうかで別々に呼称される。自己より年下の場合はそうでない。両家の祖父母は性別によって明確に区別される。自己の世代では、自己の父親の兄弟姉妹の子供には呼称がない。母親の姉妹の子供にもない。母親の兄弟の子供は自己の姉妹の子供と同じ呼称である。自己の年上の兄弟姉妹は別々の用語を持つが、年下の兄弟姉妹は自己の兄弟の場合と一括され、自己の姉妹の場合とは区別される。自己の姉妹の子供の子供はただ名前だけで呼ばれるが、自己の子供の子供又は自己の兄弟の子供の子供は孫と呼ばれる。

血縁関係用語はこうした文化の中で男性、女性の明確な区別を示す。世代レベルの階層にも明確な区別がある。自己より年長の人は尊敬され、男は女より尊敬されるが、自己より若い者

は誰も自己を尊敬しなければならない。日常活動では、男達は殆どいつも一緒の集団で同一場所で仕事や話をするし、女性は女性で又そうである。少年達はこうした社会的に分離した2つの集団のブリッジ役を果たす。例えば、女性達が食事を料理し、少年達がそれを男達のテーブルへ運ぶ。男達が食べ終わると、女性達と少年達が残り物を食べる。

地域社会内で得られる地位は、一般に年齢の下の者に対して上位にある。自己と同世代のメンバーには、尊敬の点では年長か年少かの違いで地位が決まる。トルコ語に詳しい松谷氏によれば、トルコ語の特徴の一つは親族名称の虚構的用法である[(5)]。つまり血縁関係のない他人に対しても親族名称で呼びかけることが多い。その場合の一般原則は、話者が自己自身を基準として、相手がもし自己の親族であれば自己の何に相当するかを想定し、その関係に相当する親族名称を選択する。トルコ語では家族関係を表す親族名称が豊富である。その背景には、かつての中央アジア時代のトルコ民族が遊牧生活を基礎とする大家族制であったことが考えられる。

4　ムスリムの生活様式

マームッドの村の宗教は西欧人がマホメッド教、時にはモスレムないしムスリムと呼ぶイスラム教である。アッラーは唯一神と信じられ、旧約聖書の信者のユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムの全てに崇拝される同一の神である。真なる神を認めない無宗教者とは異なり、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムは正しい道に生きているが、基本的に村のトルコ人はマホメッドに従う者のみアッラーが人間に欲することを正しく行うと考えている。ムスリムはマホメッド主義者と呼ばれたがらない。マホメッド崇拝に繋がるからである。彼は一人の予言者に過ぎない。イスラム教に内在する基本的価値の一つは神の意志への柔順である。人は人類のために神の偉大な計画の一部になろうとする。それは神の作品の道具として神が人間を使うことを可能にする世界である。未来行為の説明に付加される日常言語“Inşallah”（インシャーラ）は通常「私は望むのだが」「神が望むならば」等と訳されるが、更にいい適訳は「神の計画にピッタリするならば」である。これが村のムスリムが表現しようとしている“Inşallah”の内容である。

マホメッドはムスリムである村人達には、神が特別の仕事のために予言者として彼を選んだことを除き、一般の死すべき人間と同じものとして想念されている。彼の誕生も死も普通であった。マホメッドに従う者の多くは彼の死の直後困惑・混乱したが、選ばれた少数者はマホメッドが人々に語った多くの事柄を思い出し、彼を神として崇拝しないようにしたとされる。キリストとは対照的にマホメッドは長生きし、宗教的教えに加え商人、軍事指導者としても成功した。事実、イスラム教の成功の多くはマホメッドの軍人リーダーとしての才能のお陰である。キリスト教が普遍的価値を志向したのに対して、マホメッドの教えは当時のアラブ文化に本来的に適合している。この点から中東一帯へのイスラム教の急速な普及を説明することができる。村人達は西欧人一般に共通する聖俗の区別を行わない。イスラム教は生活様式であり、如何なる些細なことであれ、村が何か決定する際の支配要因である。コーランとその付随書は、行為の過程で疑問が生ずる場合、適切なモデルとして常に引き合いに出される。その宗教は誰もアッラーの意思に逆らえない点で基本的に宿命論的である。しかし、真のムスリムは、避けられない神の意思を甘受するのみでなく、神の計画を実行するに当たって有意義な手助けであろうとする。イスラム教の五つの教えは村人にとって大変重要である。まず一日5回、日の出、午前、正午、午後、日没にお祈りし、唯一神アッラーとその予言者マホメッドへの信仰告白を行う。何人かの村人は規則正しくお祈りするが、大抵の人はそうしない。規則正しいお祈りは宗教的祝祭日が近づくと増える。第二に、貧者に施さなければならない。施しは大きなもの、高

価なものを要しないが施しはしなければならない。大切なのは施すという行為事実である。第三に、聖なる“Ramazan”（断食の月）は絶食しなければならない。この絶食は日の出前から日没の一定時刻まで飲食、喫煙、セックスをしないことを意味する。村人達はこの時期早朝に起き、その日の絶食開始前に食事を沢山取る。生理中の女性や病人以外、その後は日暮れまで何も食べない。この期間誰も日暮れまでひもじいため、夕食はかなり大掛かりとなる。第四に、“Kurban Bayramı”（犠牲祭）に子羊を犠牲にし、肉の一部を貧者に施さなければならない。第五に、良きムスリムはメッカに巡礼するか、自分の代わりに誰かを巡礼させなければならない。1961年現在、村で誰が巡礼したかは不明であったが、いずれにせよメッカへの旅は村人達にとって大変困難である。彼等の生活水準の向上と交通の発達に伴い、少なくとも裕福な者の何人かは近い将来は巡礼に手が届くかもしれない。

村で一番立派な建物は新しいモスクである。屋根はタイル張りである。四方に小窓の付いた正方形の建物であり、石塀で囲まれている。壁にある門と入り口のドアは天然木の手造りで、村のドアや窓枠の場合と同じ造りである。壁に囲まれた敷地内は荒れていて、近年植樹された3本の若木が辛うじて生きている。建物内部の壁は白く、床は絨毯で覆われている。ドアの向かい側のコーナー2カ所には、それぞれ説経壇がある。右側のものには無天蓋の四角い講壇に繋がる階段がある。もう一つはどこにも見られる伝統的なタイプの講壇よりも大きくて、鮮やかな赤い山羊毛の敷物で装飾されている。この講壇は祭日に使用され、一方の伝統的講壇は通常の金曜日に使われる。お務めは毎金曜日の正午の祈りの時間と祭日に行われる。お務めはホジャの説経と公式の祈りから成り、ホジャは村人達がまっとうな信者の道を歩むようにと諭す。ホジャは村では政府から現金給与を受ける数人のうちの一人である。これはメンデレス内閣の改革の一つで1950年代後半から実施され、アタチュルクにより確立された国家と宗教の分離システムとは全く対照的である。ホジャは村の精神生活と同時にモスクの運営と財産に責任を持つ。年一回、村の全員からモスクのための集金がある。ホジャはある晩この問題を持ち出し、男達は車座になって村長宅で話し合う。男達の全員が出席し、集団で必要金額が論議される。議論は完全合意まで継続される。次に誰がいくら支払うかを決める。村長が誰がいくら払うかを提案する。ホジャは同意したり、多い少ないを示唆するが、通常は支払いを要求される者はその額が余りに多過ぎると発言する。更に論議が継続し、最後にその額が関係者全員の満足に達すると論議終了である。後日、村長とホジャはこの徴収額を集金する。徴収金を払えないケースの可能性について尋ねてみると、村人達はそうしたことはないと言う。現在は不払いのケースは見られないが、都市化の浸透と共に拒絶が増え、将来はきっと誰かが支払い拒否をするだろう。公的非難以外にこうした拒否に対応する仕組みが存在しないため、厳しいストレス状況が惹起するだろう。公的非難だけで現在は十分であるが、将来は保障の限りではない。

公的宗教以外にトルコの全ての村には多くの民間信仰がある。この点に関してデミルジレール村には詳細な資料はないが、「悪魔の目」（The Evil-eye）の信仰はどの村にも共通している。村人達はこの危険なものに対するお守りと考えられる青いガラス玉を家に飾っている。青いガラス玉は悪魔から人を守ってくれると信じられている。迷信がキリスト教の一部でないように、民間信仰はイスラム教の一部ではない。イスラム教とは別のものとして宗教と共存していて、こうした民間信仰とイスラム教の間には矛盾は存在しないように観察される。

5　村の教育

村の習慣や活動はフォーマル教育よりも実践を通じて伝達される。子供達は自由に過ごし、

罰せられることは稀である。彼等は早朝に起き、パン、果物、葡萄、黒オリーブを食べて戸外に出る。少年は遊び、男達の話しに耳を傾け、年長者の働く姿を観察する。少女は母親の傍らを離れない。少年少女はみんな両親の仕事を学ぼうとする。親が子供をぶつのは怖いことと見なされ、躾は穏やかな叱責の形態を取る。ルールとしては躾は親ではなく年長の兄・姉が行う。

最近まで、子供達が学習する唯一のフォーマルな場はモスクの学校だった。彼等はそこでコーランの一部を暗唱した。ホジャがモスクでアラビア語のコーランを朗吟すると、子供達は彼の言葉を何ら理解することなく正確に反復した。村人達はコーランのお祈りはアラビア語で正確に繰り返すことが効果的だと信じている。現在は毎日通う学校がカマンにある。ほぼ1950年以来、全ての少年が通学している。有能な卒業生は中学校に進学できる。その後、リセ（高校）に進む。カマンほどの規模の町に全てリセがあるとは限らないが、高校が利用できない場合、政府による一定限度の奨学金により、好成績の生徒は別の町の寄宿学校に進学できる。1961年、カマンの小学校さえ卒業したのはごく少数の村人であったが、今後は殆どの若者が卒業するだろう。近い将来、フォーマルな学校教育は村人の伝統的生活様式と矛盾するほどの革命的影響を与えるだろう。学校のカリキュラムは教育省が統制している。教育省は国家とりわけ村の近代化を教育目的の一つとしている。1961年、村人達は同一の価値を保有し、かなり同質的であった。しかし学校は今や若者に新しい価値を教え込んでいる。こうした状況下で葛藤は不可避であり、恐らく子供達のある者は自分達の家族の生活様式を劣ったものと見なし始めるだろう。

少年に関する限り、これまで最も重要な半ばフォーマルな学習の場は村長宅での夜の会合だった。寒い冬の夜など何もすることがなく、燃料も僅かであった。燃料節約のために、毎晩暗くなると男達は皆村長宅の男部屋に集合した。村長の家族の女性達は夕方部屋を掃除し、暖炉に薪をくべ、あちこちに野菜皿を配置した。夕食後しばらくして、男が一人一人好みの衣装で訪れる。村長はベンチに似た台の真ん中に腰掛ける。西欧人が椅子を用いるようには腰掛けず、男達は地面に腰を下ろすようにあぐらをかく。高齢者だけがベンチ台に腰掛ける。村長の左右両側の男は最長老である。席は12名ほどの高齢者が村長の両側で年齢順に着席するよう配列される。若者と少年は床に自由に散らばる。女性はこの部屋には入れない。少年達は静かに座っている限り居てもいい。少年が男達の議論の邪魔をすると、10代前半の年長少年がその子を素早くそっと連れ出す。少年が村の文化価値と男性としての社会的役割を学習するのは村長宅での夜の会合である。最近までこの会合にはコミュニティーの全ての男が出席した。人口増加に伴い、全ての男が一つ部屋に集まるのは無理なため、現在では不可能である。このメカニズムは間もなく機能停止となるに違いない。何世紀にわたる文化伝達の古き繋がりは壊れるだろう。年長者との接し方、村の多くの技術を少年が学習したのはこの場所であった。少年は特別に教えられはしなかったが、老人や男達が村の問題を議論する時のある種の知的雰囲気を通じてそれらの情報と考え方を吸収したのである。

夜会は友人間の取り留めない会話で始まる。それは全く自発的で、ほぼ全員が集合するまで続く。時には誰かが村長に尋ね、少女達をジロジロ見る特定の誰かの10代の息子についてどうしたものかと提案する。もし本当だと、この問題はとことん論議され、しばしば本人同席の下に最終的には適当な処罰に達する。こうした事例の公的論議は通常反則者を改めさせ、再び繰り返さなければ処罰がなくとも十分である。議論を聞くことにより、若者は成人した時に期待されることがらが何であるかを学習する。夜の会合で取り上げられる別の話題は、納税期限、モスクの年間徴収金、村の新しい道路、壁、橋の建設等である。建設の作業実施は通常は若者の無賃労働で行われ、村長がその仲間を選び、どう作業するかを彼等に告げる。これらの仕事

をいかにうまくこなし、一般的にコミュニティーの規範にいかにうまく従うかによって、若者は自己の社会的存在が認められる。男達は頻繁に集合し、満場一致の結論に達するまであらゆる問題を論議するため、全員が従う相当明確に定義された行為規範が存在する。例えば、年長者が話す時は常に年長者に従わねばならないし、両親を殴ってはいけない。誰かが父親を殴る等の酷い行為をすると、村長と村の監視人は憲兵を呼び、その少年をカマンの裁判所に引きずって行く。しかし、こうした行為違反は殆ど観察されず、一般に規則には誰もが従う。

明確なジェンダー分離のため、ムスリム社会では男が女性に関する正確な情報を入手するのは難しい。女性が自己の役割を学習するのも半ばフォーマルな場であろうが、男達の日常の会合に相当するものが存在するかどうか明確ではない。女性達は通常自分の家で家事を行い、一方、男達は村長宅で村の仕事について論議する。娘達は家で女性達と一緒に居て、母親やその他の親族をモデルにしながら女性の役割を学習していく。

おわりに

1960年代初期のトルコの村の生活について、その客観的様相を可能な限り簡潔正確に叙述してきた。トルコの村人の基本的文化価値に対する共感、村人達の社会的環境と彼等の生活パターンに関する客観的理解はこれまでの叙述の中である程度可能になったものと思われる。ここで今一度振り返ると、デミルジレール村は約50軒から成り、各々の家には拡大家族（一人の男性とその妻、息子達とその妻、未婚の娘達、息子達の子供）が住む。村はトルコのアンカラから南東に僅か110km離れたカマンの町に近い広大な半乾燥高原に位置する。周囲の地方は耕作され、その殆どが小麦であり、羊や山羊の放牧も行われている。カマンとアンカラを結ぶ道路は、近接地点で２～３km離れて村の裏手を走っている。

かつて村人の世界は自分が住む山に囲まれた平地だけから成立していた。村人にとっての価値の全てはこの盆地の中にあった。彼は自分が生産したものだけを自分の家族で消費する自給自足の暮らしであった。その盆地で生まれた殆どの者がそこで生活し、死んでいった。デミルジレールの中で、彼はそこで生まれ育った誰かと結婚することになる。従って、国際政治や国政のようなことでさえ、彼には余り関心が無かった。国民としての義務が彼にふりかかるのは２年の兵役と納税のみであった。こうして、世界は２つの異なる世界、つまりカマンを含む彼の盆地とそれ以外のトルコを含む外部世界とに別れていた。デミルジレールを取り囲む周囲の盆地とは多くの同じ文化遺産を共有しているにも拘わらず、村の住人達は他の村の住人とは異なると感じ、カマンの町の住人ともなれば更に違うと感じていた。村内では人々は２つの異なるタイプとして、優れた男達と劣った女性達とに描き分けられた。更に、特権と名誉を持つ高齢者、コミュニティー内でその日その日の日常的仕事の殆どをこなす大人、コミュニティーの運営上のやり繰りに対して何らの権限も責任も持たない子供の３者に分かれていた。

しかし村は過去数年で急速な変化を辿った。その代表事例として村長について再度取り上げると、かつて村長は村の最長老だった。村は一群の血縁関係の男達（厳格な同族結婚の故に）ばかりだったし、村長はこの拡大家族の長であった。全ての政治権力は家族構造を経て流れ、村には機能的政治組織は存在しなかった。しかし外部世界とのコミュニケーションの増大に伴い、この血縁関係は重要性を失った。1950年代半ば、血縁関係集団の長は村長として選ばれず、もっと年少の男と交代した。都市化の進展と共に政治組織がよ

トルコの或る村の冬景色 (6)

り重要となり、伝統的社会組織は喪失の運命を迎えた。

本稿が下敷きとした著書「トルコの村の生活」を著したピアースは、トルコの社会の近代化、都市化への変容を予測していたに違いない。既に彼以前の先行研究著書にアンカラ近郊のバラート（Balgat）村を研究対象とするラーナーの「過ぎ行く伝統社会」(7) がある。ラーナーが初めて訪れた1949年には、そこは文化的に孤立した小さな村であった。1961年になってピアースが当地を訪問した時、バラートは最早繁栄する郊外であり、20分毎にアンカラへのバスサービスもあって村の片側に高速道路が走っていた。近代的ショッピングセンター、ラジオ、電気トースターもあったと述べている。デミルジレール村もバラート村と類似の急激な変化に直面し、近代化への開発・発展の波が押し寄せつつあった。公教育制度の普及発展も村の子供達の就学を促し、様々な知識の学習は自分達の生活や村の在り方を批判的、相対的に見つめる目を養うことになっただろう。「古き良き」村の伝統は止むなく崩壊に向かわざるを得ないのである。

ピアースが著書「トルコの村の生活」の第一部に登場させたデミルジレール村の少年マームッドは、もし現在そのまま生きているならば50歳前後であろう。カマンの公立小学校での民主的知識の習得にも拘わらず、彼は父の土地を耕作し、同じ村出身の少女と結婚し、自分が育てられたと同じように自分自身の子供達を育て、村の中で拡大家族の良きメンバーとしてその人生を送っているのであろうか。それとも公立学校で優秀だった彼は、良い成績で学校を卒業し、奨学生として別の町の寄宿制のリセ（高等学校）での勉学を経て、幼なき頃の夢だった医者となって都会での充実した社会奉仕の日々を送っているのであろうか。1990年代後半の現代のトルコは地方から都市への人口移動の著しい時代であり、我が日本とは差異ある形ではあれ、言わばトルコ全体が農村社会から都市化社会へと急激に変貌しつつある。本稿をまとめる過程で、筆者はいつの日か再びトルコを訪れ、現在のデミルジレールやバラートがどんな町となっているか現地をフィールド・ワーキングし、実際にこの目で確かめたい気持ちを一層強く持った。そして、もし本当にマームッドが生きているならば、実際に会ってムスリムのこと等いろいろと話をしてみたいと願っている。そのためには、筆者はまずトルコ語のまともな勉強を始めなければならない。

トルコ共和国の人口と教育に関するこれまでの研究 (8) の延長線上にあるものとして、今回はトルコの「故郷（ふるさと）としてのアナトリアの村」に注目した。次回は、何らかの形でトルコの都市或いは都市生活について扱うこととしたい。今世紀の偉人ムスタファ・ケマル・アタチュルクが同志と共に誕生させた首都アンカラがその対象となる可能性は高い。

注

(1) Joe E. Pierce "Life in a Turkish Village" N. Y., Holt, Rinehart & Winston, Inc. 1964年

(2) Ömer Demir, "Cappadocia, cradle of history, Göreme" p.98 Ankara, 1990年

(3)～(4) (2) に同じ p.97, p.105

(5) 松谷浩尚「トルコ社会言語学」泰流社 1996年

(6) JICAのトルコ共和国人口教育促進プロジェクトによる撮影 1993年

(7) Lerner, Daniel "The Passing of Traditional Society" N. Y., The Free Press of Glencoe 1958年

(8) 拙稿「トルコ共和国の人口教育と教育システム」「トルコ共和国の女子教育の現状と課題」「20世紀後半におけるトルコ共和国の大学改革の軌跡」名古屋女子大学紀要（人文・社会編）第42号 1996年, 第43号 1997年, 第44号 1998年